

魏志倭人伝を考える  
—投馬国について—

1 投馬国の所在地

投馬国について「魏志倭人伝」には次のように記している。「南、投馬国に至る水行二十日。官を弥弥といい、副を弥弥那利という。五万戸ばかり。」である。記述内容は、奴国及び不弥国と同様で、方向、行程（日数）、官と副官名および国の戸数である。五万戸という戸数は、女王が都する邪馬台国の七万戸に次ぐ戸数であり、大国である。水行二十日の基点は帯方郡、出発する方向は南で、帯方郡から末盧国までの十日は邪馬台国の行程と同じである。末盧国で陸行する邪馬台国の行程と別れ、さらに水行し、十日で投馬国に至るのである。なお、投馬国の水行二十日の基点を帯方郡とすることについては、拙稿『「魏志倭人伝」の行程と「水行十日陸行一月」について—』（季刊「古代史ネット」第2号）を参照してください。

ちなみに帯方郡から邪馬台国までの行程は次図のとおりである。

図1 帯方郡から邪馬台国までの行程



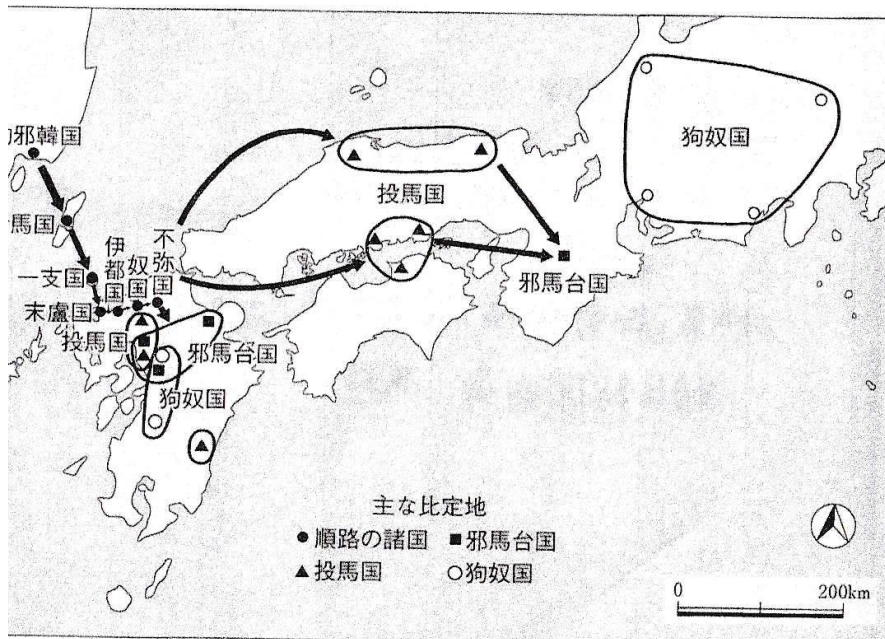
注 グーグル地図に行程と国名等を書き加えた。

「魏志倭人伝」には、末盧国から投馬国までの行程である水行十日の方向と行程の途中についての記述はない。魏使が投馬国に行っていないからであるが、末盧国からの水行十日は倭人から聞いたものであろう。投馬国は、女王国（女王が統括する三十国からなる邪馬台国連合）を構成する国の一つであり、九州島にあると考える。魏使が辿った邪馬台国（女王が都する国）までの行程は、「魏志倭人伝」に記されているので、その行程を辿ることができるが、投馬国は辿ることができない。それにもかかわらず、「魏志倭人伝」に帯方郡から出発する方向、行程（日数）、官と副官名および国の戸数が記されているのは、

邪馬台国に次ぐ五万戸の戸数を擁し、邪馬台国連合のなかでも大きな影響力を持っていた重要な国であり、無視できなかったからであろう。

投馬国がどこにあったかは、難しい問題である。それは、先に述べたように投馬国について「魏志倭人伝」には「南、投馬国に至る水行二十日。官を弥弥といい、副を弥弥那利という。五万戸ばかり。」と記載しているだけであり、このほかの記述はないからである。このため、投馬国の所在地については、次図のとおり様々な説がある。

図2 邪馬台国及び投馬国の所在地



注 「朝日選書 878 研究最前線 邪馬台国 いま、何が、どこまで言えるのか」  
(朝日新聞出版) による。

いずれも邪馬台国の所在地との関連で投馬国の所在地を考えている。これは、「魏志倭人伝」の行程に関する記述を連続式で読んでいることによるもので、不弥国から南に水行二十日で投馬国に至り、そこからさらに水行十日と陸行一月で女王が都する邪馬台国に至ると読むのである。この読み方では、投馬国にも邪馬台国にも到着することはできない。

投馬国と邪馬台国に関する行程の記述は、いずれも帯方郡を基点としているのであって帯方郡から南に水行 20 日で投馬国に至り、帯方郡から水行 10 日陸行 1 月で邪馬台国に至ると読むのである。この読み方であれば無理なく投馬国及び邪馬台国に至ることができるのである。これについては別稿で考えるので、本稿では省略する。

それでは、投馬国はどこにあるのであろうか。「魏志倭人伝」には前述のほかにもその所在地を推測させる記述がある。「魏志倭人伝」は、「女王国（この場合の「女王国」は女王が都する邪馬台国）より以北、その戸数・道里は得て略載すべきも、その余の旁国は遠絶にして得て詳らかにすべからず」として、続けて、「次に斯馬国あり（中略）次に奴国有り、これ女王国（この場合の「女王国」は女王が統括する邪馬台国連合）の極南界なり」として二十一国の国名を挙げている。この文は、女王国（この場合の「女

王国」は女王が都する邪馬台国)より以北の国については、その戸数・道里は略載することができるが、その他の二十一国は遠絶であり詳らかにすることができないと言っている。投馬国はこの二十一国に含まれておらず、また、戸数・道里が略載されていることから「女王国より以北、その戸数・道里は得て略載す」ることができる国に含まれていることが分かる。投馬国は女王国すなわち女王が都する国、邪馬台国より北にあるということである。

邪馬台国については不弥国から二日市地峡を経てさらに南の筑紫平野（筑後平野と佐賀平野を合わせた平野の総称）の中・南部にその中心地があると考えている。筑紫平野の北側で五万戸を擁する国が立地する余地は、不弥国の東方向にしかない。不弥国の西側は、奴国、末盧国、伊都国があり、そのさらに西には五万戸を擁する国が立地できるような平地はない。不弥国の東方向とは、不弥国の東の領域を画する三郡山地の東側の遠賀川流域の飯塚市、直方市、鞍手郡、宗像市、宗像郡から田川市・田川郡、北九州市、さらには周防灘沿岸の行橋市・京都郡付近、大分県の中津市・宇佐市から国東半島付近までである。これらの地域には平坦な盆地や平野があり、投馬国が立地する要件は満たしている。これより南は、女王国より以北という条件から外れる（図1の白の点線参照）。

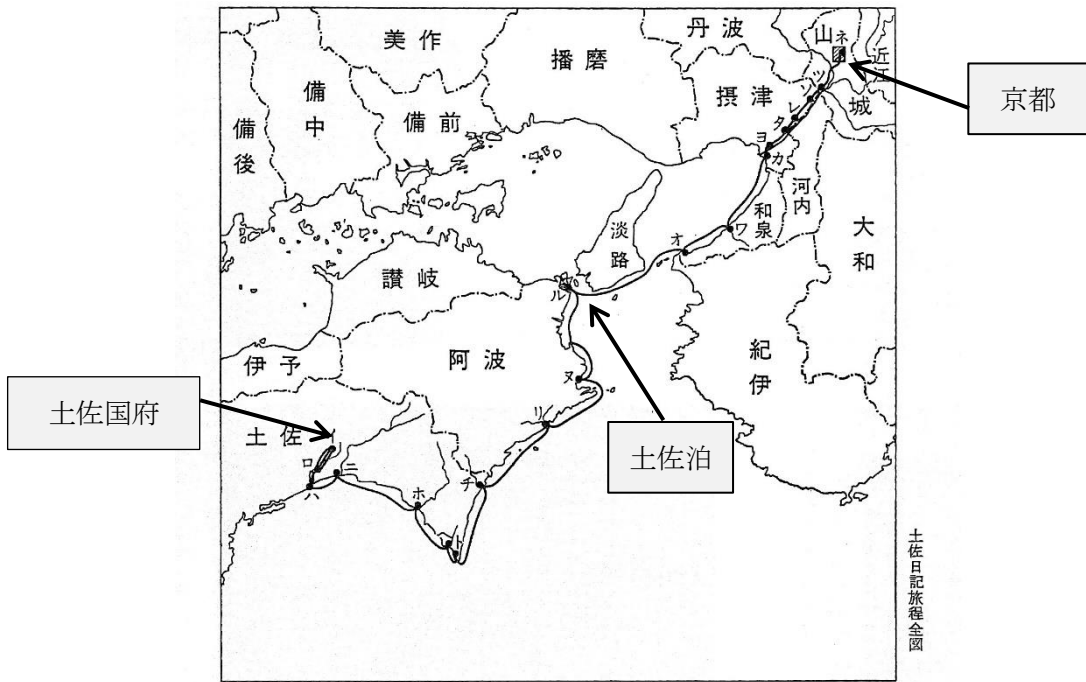
## 2 投馬国までの行程「水行二十日」について

### (1) 投馬国までの行程

帯方郡から投馬国に至る行程は水行二十日であるが、このうち十日は帯方郡から末盧国（佐賀県唐津市呼子港）までの日数であるので、残り十日が末盧国から投馬国までの行程となる。この行程は、魏志倭人伝に記述がないので全く分からず、行程を復元することは困難である。また、玄界灘から周防灘にかけての水運について研究した論文等にも接していないので、皆目わからないが、後の時代の史料から推測するはできる。

九百三十四年に成立したといわれている土佐日記には、紀貫之が国司として赴任した土佐国府から任務を終えて京都まで帰る旅の行程がつぶさに記されている。邪馬台国時代（二世紀末ごろから三世紀中ごろ）から約七百年後のことであり、船の構造、性能もはるかに進んでいると思われ、また、旅の目的も異なり、これを以て投馬国までの行程を確定することはできないが、参考にはなると思われるので、土佐日記の旅程図と日程を記した旅程表を掲げてみた（図3）。土佐日記には、紀貫之が赴任地の土佐国の国府を出発してから京都までの行程の泊地が日を追って記されている。土佐国の国府（高知県南国市比江付近）を出発してから、室戸岬を回り、阿波国の土佐泊（徳島県鳴門市土佐泊浦。ここまで十日約二百キロメートル）から鳴門海峡を渡り、和泉国の多奈川（大阪府南西部）から難波（大阪府大阪市）に至り、淀川に入って、これを遡って京都に至るのである。この行程に要した日数は十九日（土佐日記旅程表の十二月二十一日、同二十五日は二十六日の行程と重複しているので二十六日を初日とした。）で、現在の地図から推測すると、おおよそ三百七十キロメートルとなる。一日平均約十九.四キロメートルである。

図3 土佐日記旅程図及び旅程表



土佐日記旅程表

十二月廿一日	イ国府→ロ大津	四泊
廿五日	ロ大津→イ国府	一泊
廿六日	イ国府→ロ大津	一泊
廿七日	ロ大津→ハ浦戸	一泊
廿八日	ハ浦戸→ニ大湊	一〇泊
一月 九日	ニ大湊→ホ奈半	二泊
十一日	ホ奈半→ヘ室津	六泊
十七日	ヘ室津→御崎→ト(津呂)	四泊
廿一日	ト(津呂)→チ(野根)	一泊
廿二日	チ(野根)→リ(日和佐)	四泊
廿六日	リ(日和佐)→ヌ(答島)	三泊
廿九日	ヌ(答島)→ル土佐泊	一泊
卅日	ル土佐泊→オ多奈川	一泊
二月 一日	オ多奈川→ワ(佐野・貝塚)	四泊
五日	ワ(佐野・貝塚)→カ難波霧標	一泊
六日	カ難波霧標→ヨ難波河尻	一泊
七日	ヨ難波河尻→タ(江口・曲)	一泊
八日	タ(江口・曲)→レ鳥飼	一泊
九日	レ鳥飼→ソ鶴殿	二泊
十一日	ソ鶴殿→ツ山崎	五泊
十六日	ツ山崎→ネ京	

注 「土佐日記全注釈」(萩谷 朴) による。一部加筆。

土佐日記の行程は沿岸部を津浦から津浦を辿りながらの行程である。末盧国から投馬国までの十日の行程も大海を渡る行程ではなく、土佐日記の行程と同様に九州北岸を津浦から津浦を辿りながらの行程と考える。土佐日記の一日の行程は約十九.四キロメートルであるので、十日では約百九十四キロメートルとなる。末盧国から投馬国までの十日の行程を土佐日記の行程、約百九十四キロメートルと同様の航行であったと考えて、この行程を再現してみる。まず、末盧国の港(呼子港と考える。)を出航し、伊都国の港に入り、そこで一大率の検察を受け、糸島半島を回り、博多湾に入り、奴国の港に入る。さらに、博多湾を出て志賀島を回り、宗像市の神湊を経て、響灘に入り、岡垣町、北九州市小倉北区、同門司区の津から関門海峡を越えて周防灘に入り、京都平野に至る。この行程がおおよそ二百キロメートルで、十日の行程である。この付近が「魏志倭人伝」に記された投馬国の拠点であると考えている。この数値は、現在の海岸に沿って図ったものであるが、海岸の凹凸や岬などもあり、また、当時の博多湾や遠賀川の

川口は今よりはるかに内陸部に湾入していたとされ、北九州市若松区は、当時は水道で隔てられた島であったといわれているので、湾入した遠賀川の川口に入るか、若松島の水道を通るか、島の北岸沿いを通るかなどにより行程が変わることも考えられ、正確なものとは言えないものの推測する資料にはなると考える。因みに若松区は現在でも江川という細い水路で隔てられており、島と言え言えなくもない。

(2) 投馬国までの行程に使用した船舶

土佐日記が記された平安時代には、日本でも板で組み上げた船（構造船）があり、大型で帆も利用した航海であったと考えられるが、邪馬台国時代の船は下図4のとおり丸木舟や丸木舟の舷側、艫、舳などに板を取り付けた船（準構造船）である。出土史料からみると、準構造船の規模は、7メートル未満の小型船から12メートル以上の超大型船まで考えられるが、大型で船幅が1メートル程度の船では波浪に弱く、転覆するリスクが高いため海洋航行船の船体構造としては無理があると考えられている（「準構造船と描かれた弥生船団」柴田昌児）。

図4 丸木舟と準構造船の種類

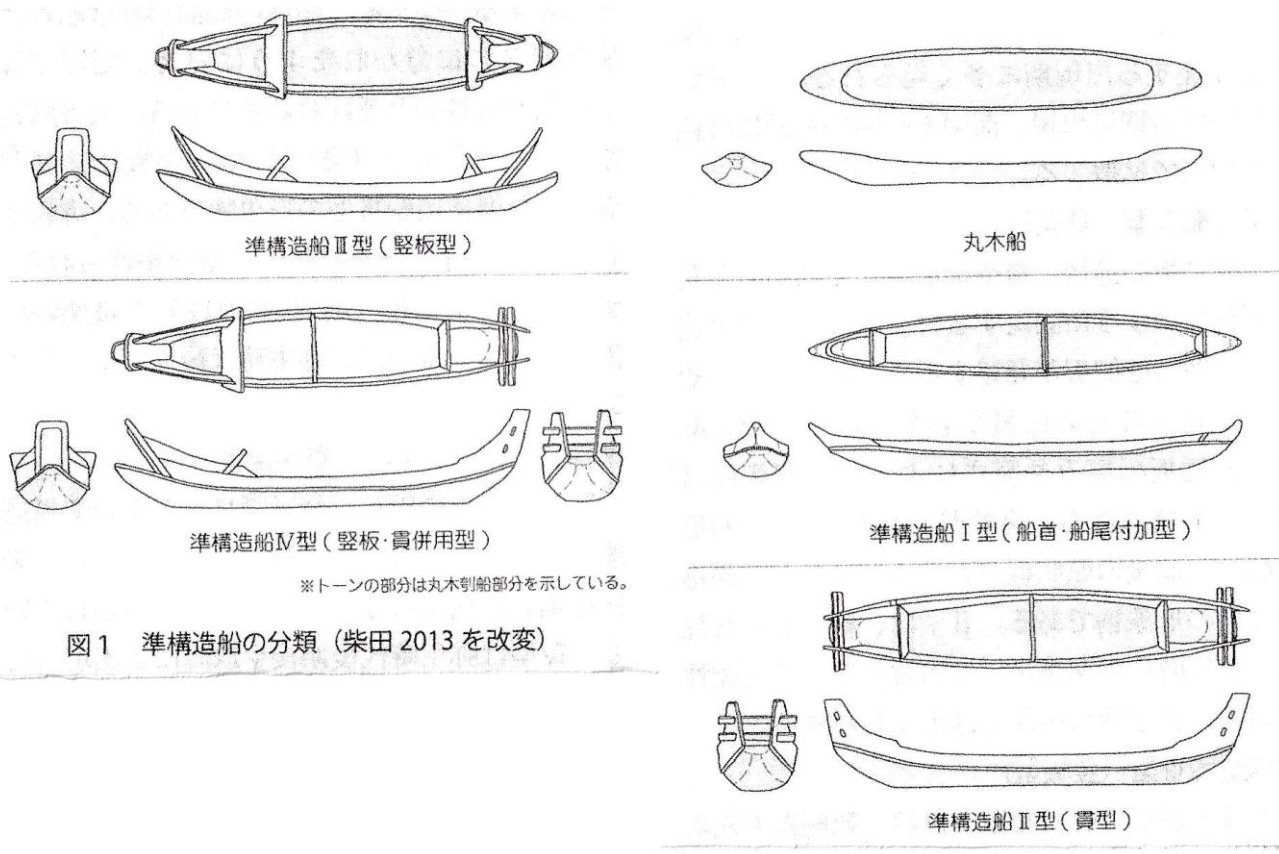


図1 準構造船の分類（柴田 2013 を改変）

注 「準構造船と描かれた弥生船団」（柴田昌児）による

準構造船は船形が小さく手漕ぎで、船幅が狭く安定性に欠け、速度も遅いことから、十日で約百九十四キロメートル航行することは難しかったとも考えられるので、上記の行程よりも短いものであったら

う。そうとすれば京都平野までは至らなかったかもしれないが、当時京都平野には草野津<sup>かやのつ</sup>と呼ばれる港があったことが知られており、その周辺には弥生時代後期の遺跡が数多くあるので、この京都平野辺りが投馬国と考えている（図 12 参照）。

因みに、中国では、広州から秦・前漢時代の船台の遺構が出土している。その船台の二枚の滑り板の中心幅は二・八メートルあり、これから推測して船幅五・六～八・四メートル、長さは二十メートル前後で、積載量が二十～二十五トンの造船（構造船）ができたと推測されている（上海交通大学造船史話組 劉茂源 訳 「秦漢時代の船舶」）。魏の時代にはさらに大型の海洋航行ができる構造船が造られ、帆走も行え、多数の員数の輸送もできたと考えられる。魏使はこの大型の海洋航行船で倭国に来たと考えられるので、倭国の準構造船よりは遥かに早く、かつ安全に倭国にたどり着いた。さらに言えば、この魏の大型の海洋航行船による帯方郡の港から末蘆国までの行程を以て末蘆国から投馬国までの倭人の航行の行程を推測し、投馬国を京都平野よりはるかに遠い宮崎県、岡山県、香川県、島根県付近等と考える説（図 2 参照）は難しいと考える。

図 5 投馬国までの行程想定図



注 グーグル地図に行程（白線）等を加筆した。

### 3 投馬国と立岩遺跡

福岡県中北部にあり、響灘にそそぐ遠賀川の上・中流域の盆地（以下「嘉穂盆地」と称する。）及びその東の小丘陵で隔てられた直方平野は、遠賀川の本流や支流が盆地・平野のなかを流れ、古来稲作が盛んで、明治時代以降は石炭が採掘され、炭鉱地帯として栄えたところである。この嘉穂盆地の中心地である飯塚市には、弥生中期（紀元前後）の遺跡が多数発掘されており、立岩遺跡群と総称されている。この遺跡群のうち、立岩堀田遺跡 10 号甕棺からは、六面の銅鏡が出土しており、有力な首長墓と考えられている。この地域が弥生中期ごろの投馬国の拠点で、弥生後期になると東隣の直方平野を経て京都平野<sup>みやこ</sup>付近に拠点を移し、さらにはその南の中津平野にも勢力を伸ばしたと考えている。弥生後期になると嘉穂盆地からは、銅鏡一枚を出土する遺跡は散見されるが、有力な首長墓と目されるような際立った遺跡は発掘されておらず、京都平野付近から多数の銅鏡、鉄製武器、玉類を伴う遺跡が発掘されているか

らである。

嘉穂盆地は内陸である。このため、投馬国の経済基盤は、稲作と石包丁の生産・移出であったと考える。立岩遺跡群の北西の笠置山からは、良質の輝緑凝灰岩が産出しており、これを加工して稲の穂を摘み取る石包丁が生産された。伊都国、奴国等の玄界灘沿岸諸国が漁労とその航海技術を使った朝鮮半島や中国との交易をその経済的基盤としていたこととは異なるのである。これが、投馬国が飯塚盆地から京都平野へ領域を広げていく背景にあると考えている。

立岩遺跡群は昭和三十八～四十年（一九六三～六四年）に調査が行われ、弥生時代中期の甕棺墓四十三基、貯造穴二十六基などが見つかっている。甕棺からは、前漢鏡をはじめとする当時の貴重な品々が副葬品として出土している。その中心をなすのが中期後半の立岩堀田遺跡で 10 号甕棺には前漢鏡六面、中細形銅矛一本、鉄剣一本などの遺物が副葬されており、この地域を支配していた王墓と考えられている。28 号甕棺からは碧玉製管玉五百五十三個、塞杆状ガラス器五個などが出土しているが武器は出土していないことから被葬者は女性で王妃と考えられている。このほかに 34 号甕棺からは右腕にゴホウラ貝で作った貝輪（貝釧）<sup>かいくしろ</sup> 十四個を着けた男性の骨が見つかっている。ゴホウラ貝は琉球の海でしか採れず、権威の象徴で、この男性はこの地域の首長と考えられる。この時代には立岩と琉球が交易で繋がっていたことを示している。

表 1 立岩堀田遺跡から出土した主な遺物

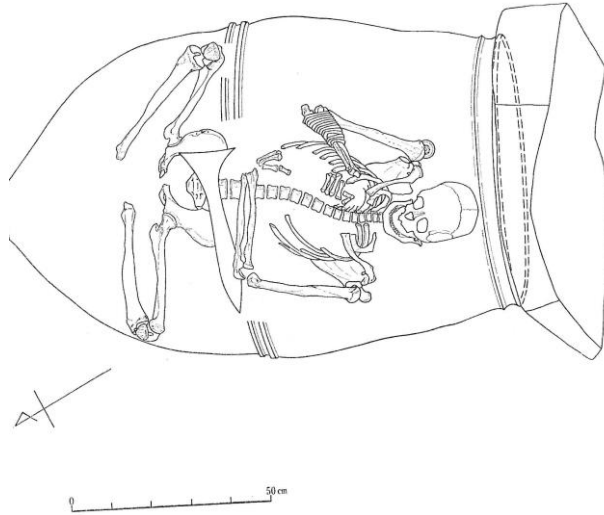
甕棺	銅鏡	青銅器	鉄製武器	装身具	その他
10 号	連弧文日有喜鏡 2 重圈精白鏡 1 重圈清白鏡 1 連弧文清白鏡 1 重圈姚皎鏡 1	中細矛 1	剣 1 やりがんな 鉞 1		砥石 2 鉄剣の柄に巻かれた絹 撚糸
28 号	重圈昭明鏡 1		素環頭刀子 1	碧玉製管玉 553 塞杆状ガラス器 5 棗玉 1 丸玉 1	素環頭刀子に付着した 絹平織
34,35, 36,39 号	連弧文清白鏡 1 連弧文日光鏡 1 単圈久不相見鏡 1		戈 2 矛 1 剣 2 鉞 1 刀子 1	ゴホウラ製貝輪 14 玉類 30～40 (棺外)	貝輪を着けた男性の人 骨 (34 号) 矛と鉞に 付着した絹平織

注 「立岩遺蹟」(立岩遺蹟調査委員会編)、飯塚市歴史資料館の展示案内から作成した。

図6 立岩堀田遺跡 34号甕棺出土の  
碧玉製管玉（復元想像図）



図7 立岩遺跡 34号甕棺出土のゴホウラ製  
貝輪装着人骨



注 「立岩遺蹟」（立岩遺蹟調査委員会編）による。

これらの出土品は、弥生中期の伊都国の王墓といわれる三雲南小路 1 号 2 号遺跡（表 2）や同じく奴国の王墓といわれる須玖岡本 D 地点遺跡（表 3）の出土の銅鏡数には及ばないものの十面の銅鏡、多数の装身具のほか三雲南小路 1 号 2 号遺跡等からは出土していない鉄製武器が多数出土しているなど豪華なもので、有力な王がいたと考えられる。

表 2 三雲南小路 1 号 2 号遺跡（伊都国）から出土した主な遺物

銅 鏡	青銅製武器	装 身 具	そ の 他	時 期
重圈彩画鏡 1	銅矛 2	ガラス勾玉 15	璧 8	中期後半
雷文鏡 1	銅劍 1	ヒスイ勾玉 1	金銅製四葉座金具 8	
清白鏡 30	銅戈 1	ガラス管玉 60		
星雲文鏡 1		ガラス垂飾 1		
昭明鏡 5				
日光鏡 1 6				
不明 3 以上				

注 「北部九州弥生・古墳社会の展開」（井上裕弘 梓書院）による。

表 3 須玖岡本遺跡 D 地点（奴国）から出土した主な遺物

銅 鏡	青銅製武器	装 身 具	そ の 他	時 期
草葉文鏡 1	銅矛 6	ガラス勾玉 1	璧 2	中期後半

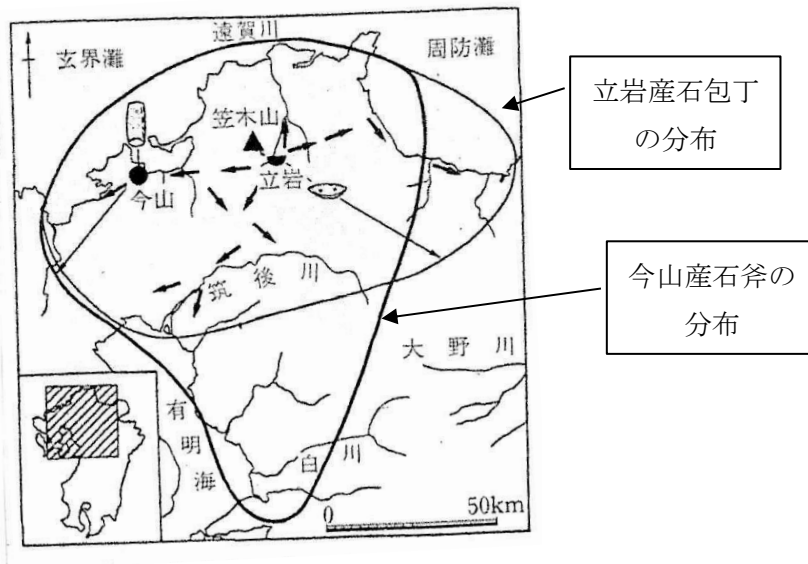


星雲文鏡 5	銅劍 2	ガラス管玉 12		
清白鏡 8	銅戈 1			
昭明鏡 4				
日光鏡 4				
破片 3以上				

注 「北部九州弥生・古墳社会の展開」(井上裕弘 梓書院)による。

立岩はもともと上質の石包丁産地として知られていた。石包丁は稲作に必要な道具である。遺跡の北西に位置する笠置山の輝緑凝灰岩を材料にして作られ、立岩遺跡周囲からは未完成の石包丁が多数出土しており、遺跡周辺に加工工房があったと考えられている。立岩製の石包丁は、福岡県内をはじめ佐賀県や大分県まで広く分布しており、この石包丁の移出がこの国の繁栄の一翼を担っていたと考えられる。

図8 石包丁・石斧の分布図

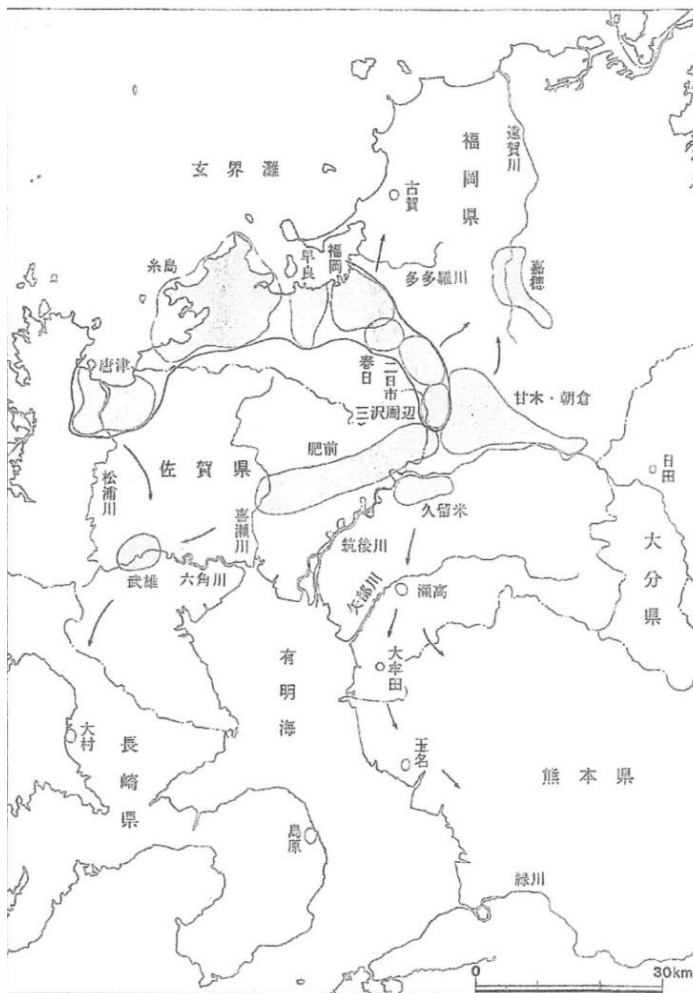


注 「倭人と鉄の考古学」(村上恭通)による。

また、立岩遺跡群がある嘉穂盆地周辺は、当時の北部九州で最も有力な地域だった奴国(福岡平野)との関係が強い地域である。奴国は後漢の武帝から金印を下賜され(五十七年)、その後、後漢の権威を背景にして勢力を拡大し、倭国の中心として栄えていた。奴国の墓制は甕棺墓であり、その分布をみると、末盧国、伊都国、奴国、不弥国から背振山地の南麓、筑紫平野に分布しているほか、飛地的に立岩遺跡群からも多くの甕棺墓が発掘されており、嘉穂盆地には甕棺を製作する工人集団がいたことが知られている。その中で立岩10号墓の甕棺には奴国の領域である二日市地域で製作されている道場山型の甕棺が使用されている。これらのことは、奴国の一部が嘉穂盆地に進出し、その文化が現地の部族に受け入れられ、甕棺墓制が嘉穂盆地に広がるとともに、嘉穂盆地の首長一族と婚姻関係にあった奴国の王族出身者の死に際して出身母体の奴国が甕棺を送ったのではないかと推測されているのである。そして内

陸である嘉穂盆地の王墓から琉球産のゴホウラ貝製の腕輪が多数出土したことも奴国を通じて入手していたのであろうと領けるのである。立岩遺跡を中心とする嘉穂盆地の勢力は、自らの生産力と奴国との強い繋がりを背景として栄えていたのである

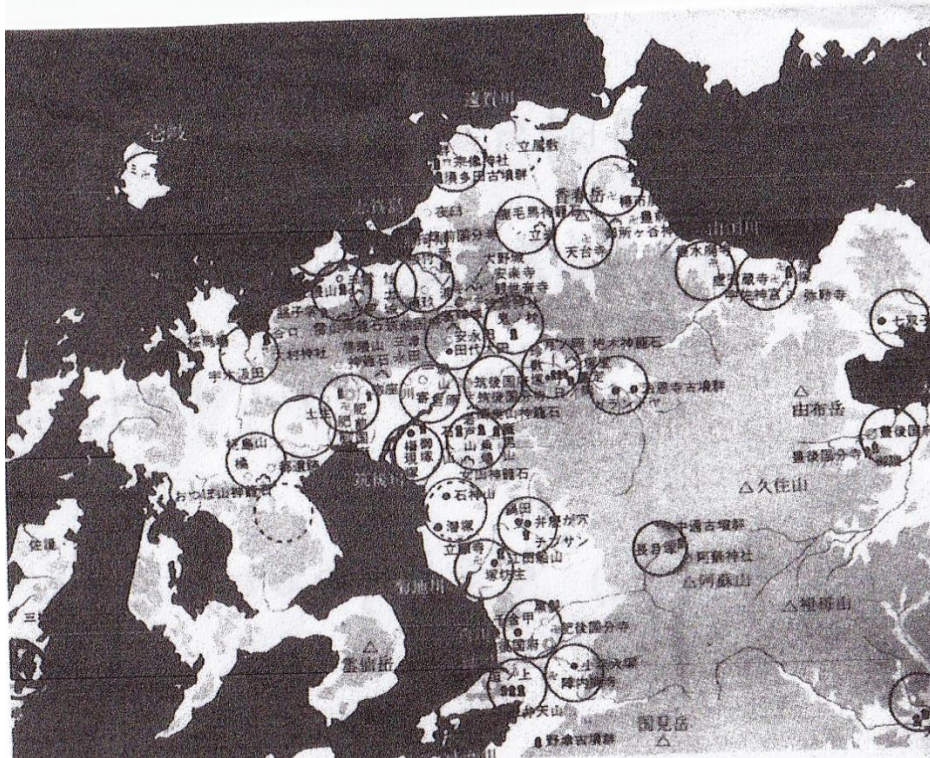
図9 甕棺墓の分布



注 「甕棺と弥生時代年代論」(橋口達也)による。

この頃の倭について「後漢書倭伝」は、「倭は韓の東南大海の中にあり、山島に依りて居をなす。凡そ百余国あり。」と記している。この国々を想定した図の一例を示すと図 10 のようである。多くの小国家が群立している様子がうかがわれる。この国々は、玄海灘沿岸から二日市地峡を経て筑紫平野に密集しているが、その東にも小国家群がある。このうちの一つ、もしくはこの小国家群が投馬国と考える。

図 10 九州北部の国々



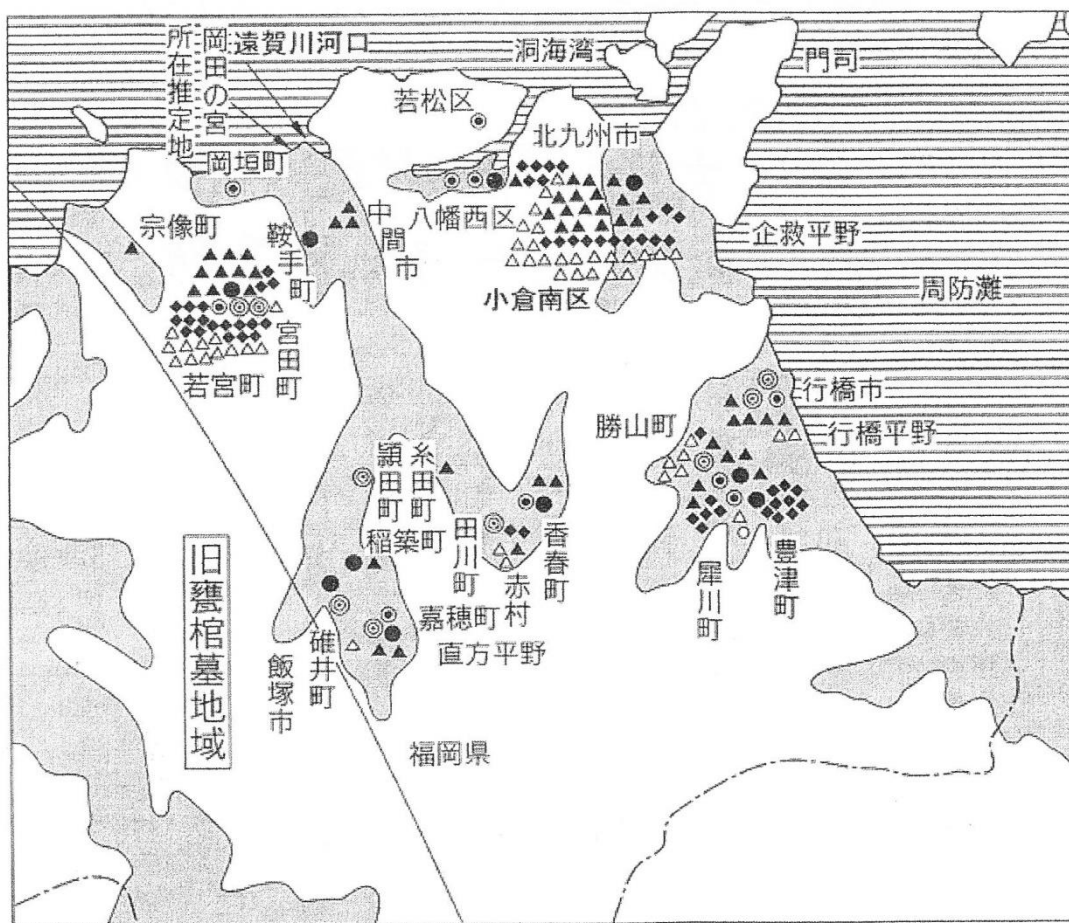
注 「吉野ヶ里から見たヤマト」(高島忠平)による。

### 3 投馬国と京都地域<sup>みやこ</sup>

石包丁は、時代を下ると、より鋭利で加工性に優れた銅器、鉄器の普及により、廃れはじめ、需要がなくなっていく。石包丁の生産・移出や奴国との強い関係を背景に栄えた投馬国は、その経済的基盤を失い、さらに倭国大乱により奴国が倭国における覇権を失うとともに、急速に衰えたと考えられる。海への出口がない嘉穂盆地の限られた耕地の稲作の生産のみでは、膨れ上がった人口を賄うことができず、投馬国は、直方平野を経て、さらに周防灘に面した京都<sup>みやこ</sup>、行橋地域を目指して東進した。

この状況を邪馬台国時代の遺物の出土状況から見ると、京都平野付近の遺跡からの銅鏡、鉄製武器等の出土が多くなっている一方で、嘉穂盆地からも数は少ないが銅鏡や鉄製武器等を出土する遺跡がいくつかみられる(図 11)。投馬国は、稲作の適地である嘉穂盆地付近に勢力を残しながら、狭い盆地からその東の海に開けた京都平野(行橋市・京都郡)に中心地を移し、さらには遠く中津平野方面にまで勢力を伸ばし、広大な地域をその領域とすることにより五万余戸の人口を擁する大国になったと考える。そしてこのことは、投馬国の視線を、「魏志倭人伝」が「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆和種なり。」と記す瀬戸内方面、さらにその東の近畿方面に向けさせることとなるのである。

図 11 邪馬台国時代の九州北東部の遺物の出土状況



地図 7 遠賀川流域近辺での遺物の出土状況

- ◎印は、小形仿製鏡第Ⅱ型。
- 印は、箱式石棺から出た鏡。
- ◆印は、箱式石棺から出た鐵。
- 印は、玉の出土地点。
- ▲印は、箱式石棺から出た鉄の剣・刀・刀子等。
- ◎印は、「長宜子孫」銘内行花文鏡。
- △印は、箱式石棺から出たその他の鉄器。

注 「古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎」(安本美典)による。

本図の「行橋平野」は京都平野とほぼ同義である。

行橋市・京都郡周辺は、大きな開発がないため、遺跡の発掘は少ないが、このなかで弥生後期の首長墓で行橋市・京都郡の中心遺跡と考えられる徳永川の上遺跡からは、銅鏡5面のほか、鉄剣、鉄製刀子、鉄鏃、鉄製釣針などの鉄製品が多数出土している。弥生後期の拠点地域の一つと考えられ、この付近が東進した投馬国の新たな拠点地域ではなかったかと考える。

表4 徳永川ノ上遺跡墳墓出土遺物一覧

遺物 ( )は数量	出土遺構	備考
舶載方格規矩鏡 (1)	2号墳丘墓 1号棺	破鏡、面径約10cm
ガラス小玉 (32)	2号墳丘墓 1号棺	
鉄製刀子 (1)	2号墳丘墓 1号棺	鹿角製柄
鉄鏃 (2)	3号墳丘墓 1号棺	柳葉形鏃・圭頭形鏃
ガラス小玉 (21)	3号墳丘墓 3号棺	
鉄鏃 (1)	3号墳丘墓 4号棺	透孔付圭頭形鏃
鉄鏃 (1)	3号墳丘墓 9号棺	圭頭形鏃
鉄剣 (1)	4号墳丘墓 3号棺	
鉄鏃 (2)	4号墳丘墓 3号棺	透孔付柳葉形鏃
舶載長宜子孫内行花文鏡 (1)	4号墳丘墓 4号棺	面径13cm
勾玉 (1)・管玉 (19)	4号墳丘墓 4号棺	軟玉製・グリーンタフ製
素環頭刀子 (1)	4号墳丘墓 4号棺	
鉄剣 (1)	5号墓	完形全長31.1cm
舶載方格規矩鏡 (1)	6号墓	破鏡、面径10.5cm
素環頭刀子 (1)	6号墓	完形全長14.2cm
舶載三角縁画像鏡 (1)	8号墓	破鏡、面径約22cm
勾玉 (1) 管玉 (3) 小玉 (85) 粟玉 (45) 丸玉 (1)	8号墓	ヒスイ製 (勾玉)・ガラス製 (小玉・粟玉)・水晶製 (丸玉)
管玉 (1) 小玉 (8)	10号墓	グリーンタフ製・ガラス製
勾玉 (1) 丸玉 (1) 管玉 (13) 小玉 (19)	13号墓	ヒスイ製 (勾玉・丸玉) メノウ・碧玉・グリーンタフ・ガラス製 (管玉) ガラス製 (小玉)
舶載盤龍鏡 (1)	19号墓	面径9.8cm
勾玉 (1) 管玉 (1) 丸玉 (1) 小玉 (9)	20号墓	碧玉製 (勾玉・管玉) ガラス製 (丸玉・小玉)
鉄鏃 (2) 刀子 (1)	31号墓	透孔付柳葉形鏃
鉄製釣針 (5) 鉄鏃 (2) 刀子 (1)	42号墓	透孔付柳葉形鏃・圭頭形鏃
素環頭刀子 (1)	43号墓	完形全長10.9cm
鉄鏃 (1) 素環頭刀子 (1)	44号墓	透孔付柳葉形鏃
鉄鏃	2号甕棺墓	透孔付柳葉形鏃

注 「行橋市史 資料編 原始・古代」(行橋市)による。

投馬国が弥生後期に拠点移した行橋市、京都郡地域は、瀬戸内海に面し、海を隔てて女王国の東にある倭人の国々である安芸、吉備、四国やさらにその東方の近畿方面にも接しており、これらの地域との交易を行える位置にある。

弥生後期は、卑弥呼が倭国を統括しており、大陸や朝鮮半島との交易は、伊都国の一大率の檢察のもとにおかれ、それまでの自由な交易は制限された。奴国が持っていた大陸や朝鮮半島との交易権が女王の管理下に置かれ、その統制の下に行われることとなるのである。「魏志倭人伝」は、これを「女王国(女王が都する邪馬台国)より以北には、特に一大率を置き、諸国を檢察せしむ。諸国これを畏懼す。常に伊都国に治す。国中において刺史の如きあり。王、使いを遣わして京都・帯方郡・韓諸国に詣り、および郡の倭国に使いするや、皆津に臨みて搜露し、文書・賜遺のものを伝送して女王に詣らしめ、差錯するを得ず。」と記している。

投馬国は、女王国が都する邪馬台国から遠く離れた京都平野に拠点を移し、女王の交易統制の及ばないことを利用し、女王国(女王卑弥呼が統括する三十国からなる邪馬台国連合)の諸国で生産された土器、銅器等のほか、女王国を経由して大陸や朝鮮半島の鉄器等の文物を入手し、これらを東方の倭人の諸国に移出する中継交易を自由に行うことにより、稲作とともに経済的基盤を確保することができ、五万余戸の人口を養い、さらにこれらの東方諸国の文化に接し、これを受け入れることができたと考える。

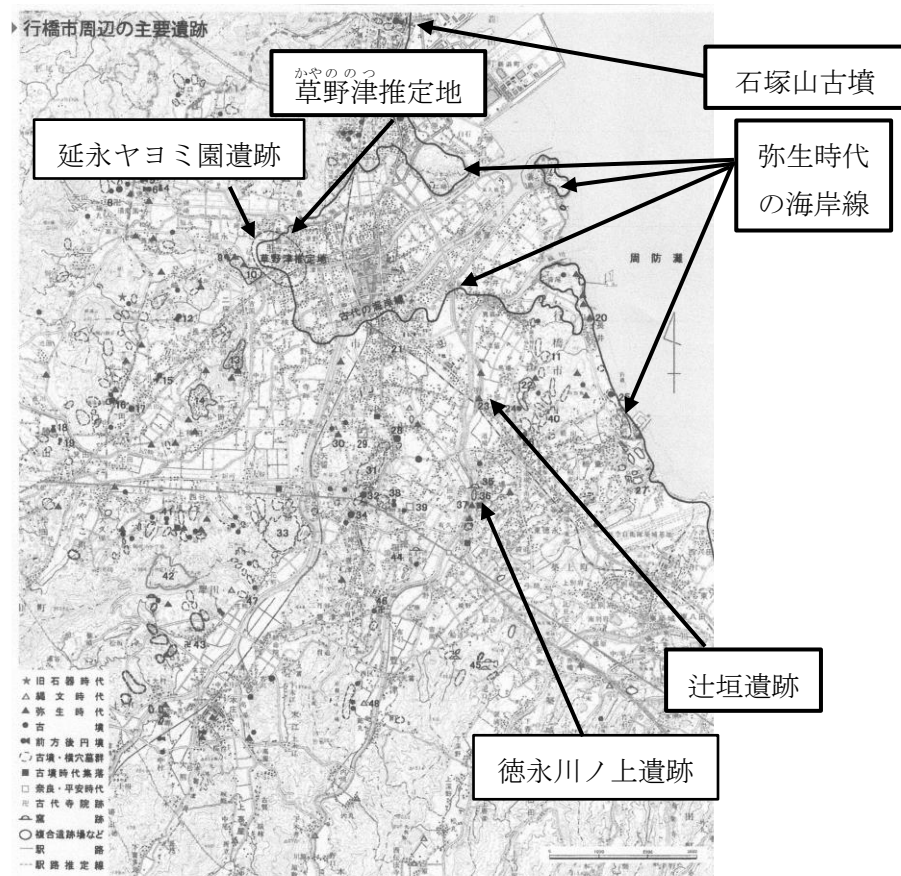
#### 4 投馬国と瀬戸内・近畿地方との関わり

行橋市・京都郡周辺は瀬戸内海に面しているため、海を通して瀬戸内海地方や近畿地方との関わり

が大きい。延永ヤヨミ園遺跡付近は、当時は周防灘が深く湾入した海岸近くの丘陵上にあつて、近くまで海が迫っており、「類聚三代. 格」に記された「草野津<sup>かやのつ</sup>」と考えられている遺跡がある。時代は下るが古墳時代後期前半に属すると考えられる準構造船の塹板が出土しており、瀬戸内から近畿への海上交通の要衝であったことが窺われる。

このような地政学的位置にある行橋市・京都郡周辺の遺跡からは、九州の他の地域とは異なった遺物が多く出土している。例えば京都郡の南の築上郡築上町の安武・深田遺跡出土の線刻絵画土器（図 12）は、吉備地方の土器であり、胴の上部に鳥や鹿の線画があり、口の外側に凹線を廻らしている。さらに鏝状鉄器や鼓石・砥石など九州内陸部とは異なった遺物が出土している。辻垣長通遺跡出土の土器（図 15）は、徳島県名東遺跡で発掘された土器と同様なもので、赤い顔料を作るための土器であり、四国の朱の産地との交流が想像されるものである。さらに延永ヤヨミ園遺跡出土の手あぶり形土器（図 13）は、近畿地方の影響のある土器で、火を用いた祭りの道具と考えられている。また祭祀の際に水を浄化するための道具と考えられている最古級の木樋（図 15）が出土しているが、木樋は、纏向遺跡からも出土している。行橋市・京都郡周辺の遺跡からは、広型銅矛が出土しているなど九州の他の地方と同様の祭祀用青銅器を用いた祭祀が行われている一方で、いち早く近畿地方の祭祀が取り入れられていたことがうかがわれ、これらがこののち九州最古級の前方後円墳である石塚山古墳の築造にも繋がっていくのである。

図 12 行橋市周辺の主要遺跡



注 「平成二十九年度行橋市歴史資料館特別展 邪馬台国時代の豊」

(行橋市歴史資料館編集) による。遺跡名等を加筆。

図 13 安武・深田遺跡出土の線刻絵画土器



図 14 延永ヤヨミ菌遺跡出土の手あぶり形土器

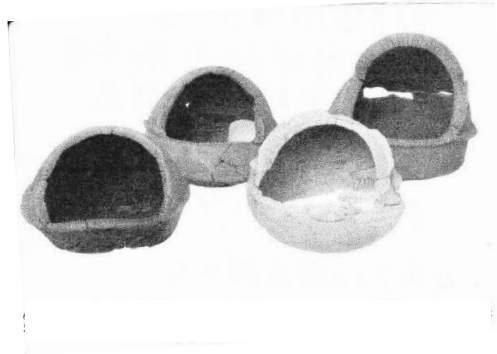


図 15 延永ヤヨミ菌遺跡出土木樋展開図及び出土状況

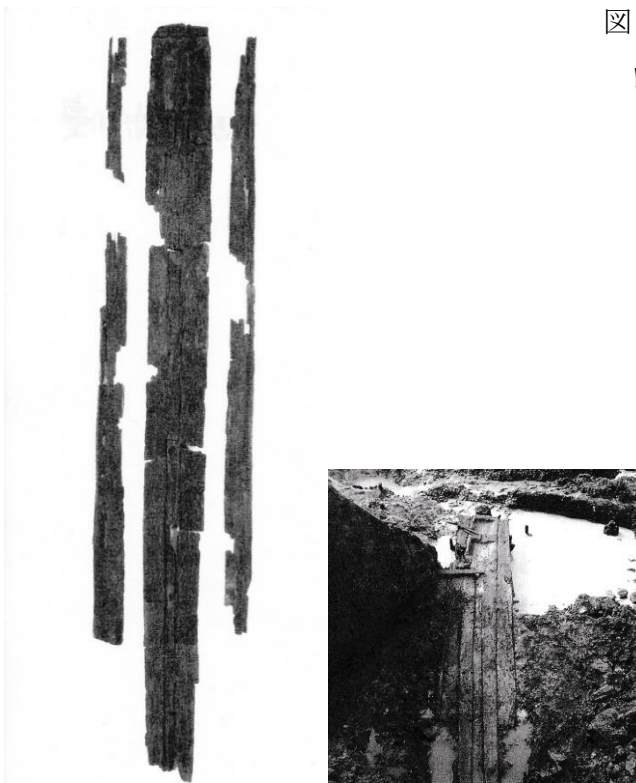
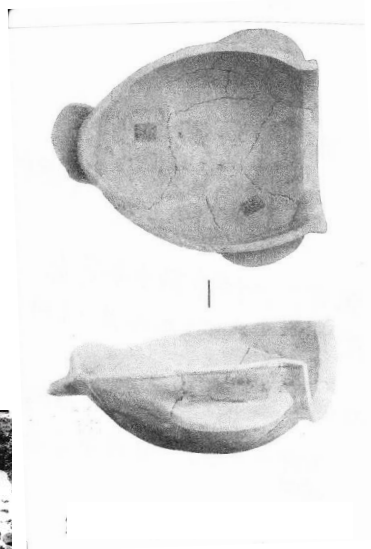


図 16 辻垣長通遺跡出土の朱詰土器



注 図 13～16 はいずれも「平成二十九年度行橋市歴史資料館特別展 邪馬台国時代の豊」(行橋市歴史資料館編集) による。図 16 の木樋の出土状況は「特別展 京都平野と豊国の古代」図録(九州歴史資料館編集) による。

## 参考文献

- 石原道博編訳 「新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝（1）」岩波文庫 （株）岩波書店 1951年
- 全訳注 藤堂明保・竹田晃・影山輝國 「倭国伝 中国正史に描かれた日本」講談社学術文庫（株） 2011年
- 萩谷 朴 「土佐日記全注釈」 角川書店 1967年
- 井上裕弘 「弥生・古墳文化の研究」 梓書院 2011年
- 奥野正男 「奥野正男著作集Ⅰ 邪馬台国はどこだー吉野ヶ里はヒミコの居城ー」 梓書院 2010年
- 片岡宏二 「続 邪馬台国論争の新視点ー倭人伝が語る九州説ー」 雄山閣 2019年
- 佐伯有清 「魏志倭人伝を読むー邪馬台国への道ー 上 下」 歴史文化ライブラリー（株）吉川弘文館 2000年
- 榊原英夫 「邪馬台国への径ー「魏志東夷伝」から「邪馬台国」を読み解こう」 海鳥社 2015年
- 石野博信/高島忠平/西谷正/吉村武彦 編 「朝日選書 878 研究最前線 邪馬台国 いま、何が、どこまで言えるのか」 朝日新聞出版 2011年
- 上海交通大学造船史話組 劉茂源 訳 「秦漢時代の船舶」「文物」[1977年第4期] えとのす第13号 新日本教育図書 1980年
- 高島忠平 「吉野ヶ里から見たヤマト」 奈良県香芝市二上山博物館編 「邪馬台国時代のツクシとヤマト」 学生社 2006年
- 遠澤 葆 「魏志倭人伝の航海術と邪馬台国」 成山堂書店 2003年
- 橋口達也 「甕棺と弥生時代年代論」 雄山閣 2005年
- 立岩遺蹟調査委員会編 「立岩遺蹟」 河出書房新社 1977年
- 行橋市歴史資料館編集 「平成二十九年度行橋市歴史資料館特別展 邪馬台国時代の豊」 行橋市教育委員会 2017
- 行橋市史編集委員会編集 「行橋市史 資料編 原始・古代」 行橋市 2006年
- 九州歴史資料館編集 「「特別展 京都平野と豊国の古代」図録 九州歴史資料館 2022年
- 安本美典 「古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎」 勉誠出版 2003年
- 柴田昌児 「Ⅱ 準構造船と描かれた弥生船団」 論文
- その他多数